

《研究ノート》

未来を創る

No excuse, Just Break Through for the Future !

上野 裕一

Breakthrough for the Future

No excuse, Just Break Through for the Future !

Yuichi UENO

キーワード：ラグビー，指導

Key Words: Rugby, Coaching

はじめに

第1章 生きることの体幹を創る—体力と感性

第2章 こだわりを創る—「教えない」指導

第3章 価値を創る—スタイル論

第4章 時計を創る—ビジョンの構築

第5章 未来を創る—突き抜ける力

はじめに

世界中の誰がこの瞬間を予想しただろうか？

筆者もラグーマンの端くれ，日本ラグビーの強化にも長年携わってきた。

しかし，この奇跡のような結果が起こるとは想像すらしなかった。

だから凡庸なのだ，といわれようとも反論の余地もない。

2015年9月19日，ラグビーワールドカップ・イングランド大会での第1戦。日本は過去二度の優勝を誇る世界ランキング第3位の南ア

フリカと対戦した。そしてエディー・ジョーンズHC率いる日本は，南アを撃破した。

3点ビハインドで迎えた試合終了間際の土壇場。キャプテン・リーチは最前列の堀江に声をかけスクラムを選択した。ペナルティーゴールを狙えば，ゴールキックの名手・五郎丸なら難なく同点で試合を終えることができる。エディーに限らず，世界中のどの指導者でも，間違いなく確実に3点を取っての同点引き分けを選択しただろう。同点だったとしても・・・翌日，世界中の新聞には“ジャパン-南アと引き分ける！奇跡の引き分け！！”と大見出しになったに違いない。

しかし選手たちは違った。ここで選手たちには引き分け同点という選択肢はなかった。

“絶対に勝ちきる”

“勝つためにおれたちはここに立っている”

“勝つために世界一の練習をしてきた”

彼らこそ，間違いなく世界中で無二の存在。

この勝利を常日頃から想定し、確信してきたのである。ジャパンは果敢に攻めた。幾度となく繰り返された連続攻撃、そして小刻みに右左に攻撃を仕掛けた。どのくらいの時が止まって見えただろうか……。ロスタイムはまるで写真のショットが綴られていくようであった。その奇跡の時に向かい、右端に集められたボールを日和佐が左にさばく、そのパスを受け取った立川からマフィーにロングパス、南アの選手たちの足は完全に止まっている。彼らは、決していつもの彼らではなかった。あの瞬間・・・あの南アの選手たちはどこにでもいるただの外国人選手になっていた。そして、ジャパンの心優しきトンガニーズ（マフィー）は最大のピンチに焦る南アの巨漢を右手で一突き。最後のパスはキウイから来た突貫小僧へスパスへ。この一瞬のために、この世界を揺るがす瞬間のためだけに投入されたようなこの男は、なんとインゴール左端に飛び込み、奇跡の大逆転トライをやった。ジャパンは世界最強軍団の一角、南アの巨人たちを34-32で撃破したのである。リーチ、マフィーもヘスケスも、ここで戦う外国人選手たちは、みな母国の代表ではなく日本代表を選んだ。日本で学び、日本で育ち、日本で生活し、日本を愛し、日本のために命がけで戦った。列記としたジャパンの選手たちである。

ラグビーには社会を変えるちからがある。それは人を育てるちからであり、リーダーを創り上げるちからである。これまでラグビー経験者たちは、そのちからが何であるかを具体的に示してこなかった。それゆえに、ラグビーに触れる機会のなかった人たちには、いまひとつラグビーというスポーツがわからない。それは決して人に語れるだけの甘美なものではなく、血と汗がまじり、泥にまみれて生まれてくるものだ。

下手をすれば大きな事故につながるかもしれない。それでも練習を重ね、プレイを続けることから、彼らは特別なちからを身につけていく。

日本は2019年、3年後にはワールドカップの開催を控える。改めてこの機に、ラグビーの持つちからを、この日本社会へ、アジアへ、そして世界へと発信していきたい。日本ラグビーの新しい方向性とは、2019年に日本でワールドカップを開催し、よい成績を残し、ワールドカップが終わった後にもラグビーがさらに発展し、この競技を愛する人たちの手によってラグビーのちからが広められ、多くの有能な人材を社会に輩出し続けることである。その結果として、将来、平和で明るく活力のある社会が創出されていくことが究極の目的である。

ラグビーには人を創り上げる力がある。本論でその創り上げる力について少しばかり論じていきたい。

第1章 生きることの体幹をつくる —体力と感性

スポーツの世界でコア・トレーニングということが最近よく言われるようになった。ここで言うコアとは腹腔の周辺にある深部筋肉のことである。このコア、つまり体幹を支えるからだの中心部にある深部筋群がより大きな力を発揮できると、姿勢がくずれないと言われている。ラグビーで言えばタックルされても簡単には倒れないし、正しい姿勢を保ってスクラムを組むことができる。ラグビーの試合において、倒れずにプレイをできるかどうかは非常に大きな違いを生む。ラグビーでは倒れているプレイヤーはボールの争奪に全く参加できない。だから倒れないでプレイを続けることは非常に大きな意

味を持っているのである。また、正しい姿勢でタックルにいくことができるということは、怪我をしにくいということも意味する。これは、例えばボディビルダーのように外から見てわかりやすい筋肉ではなく、もっと深層にあって人間の姿勢を保っているものである。それがよくわかるのは、バレエダンサーの体であろう。特に女性のバレエダンサーの体は表面的にはいかにも華奢に見えるが、彼女たちは片脚立ちでのバランスや回転などにおいても常に体の中心軸をぶらさずに鉛直的な姿勢を保っている。それは彼女たちが長期間にわたって行うレッスンを、自らの体の軸となる部分、つまり体幹を鍛えるトレーニングとなっているからである。多様な表現や、高度なバレエ技術は、ダンサーがそれらを可能にする体幹を持っていることの証であるとも言える。このようなことから考えると、体幹がしっかりしていれば片脚立ちなどの不安定な姿勢をとっても倒れず、かつ美しい姿でいられるとも言えそうである。

今見てきたように、姿勢というのは身体のとる姿という場合とは別に“生きる姿勢”や“仕事に取り組む姿勢”などと言うメタファーにも用いられる。PostureではなくAttitude、ものごとへ向かう心的態度を意味する場合にも用いられる言葉である。つまり人が何かに取り組むとき、それに向かう姿勢が大切であるならば、姿勢を支える体幹に当たる人間を深層から支える何らかの要素もあるはずである。それは何なのか。筆者は、このような人間が生きることに於ける体幹を体力と感性だと考えている。

体力から考えてみる。

学習指導要領に例示されたことで、近年小学校の体育の時間にタグラグビー（腰に付けた2本の帯：タグのうち一本を相手からもぎ取るこ

とで、タックルとみなす少人数制のノンコンタクトラグビー）が取り入れられることも見られるようになってきた。ラグビーというスポーツは、サッカーや水泳、野球などに比べて子どもたちにとって身近なものではない。中学校に進学しても部活動としてラグビー部のある学校はほんの一握りであるし、ラグビースクールの数もサッカー教室や水泳教室に比べれば圧倒的に少ない。高校や大学で初めてラグビーに触れたという選手も少なくない。しかしそのように10代の後半になってからラグビーを始めた人の中からも日本代表選手になった人が数多くいる。人間の能力はいつまでにそれを習得しなければ身につかないという臨界期というのがあるが、ラグビーというスポーツにおいては、その臨界期は比較的遅いように感じる。2016リオ五輪から女子7人制ラグビーがオリンピック競技として採用された。国内における女子ラグビーの競技人口は極めて少ない。それでも初のオリンピックからサクラジャパンはアジア代表として参加することができた。女子ラグビーのほとんどの選手は高校まで他種目で競技をしてきた。この事は日本人選手に限らず世界の女子ラグビー界で共通しており、強豪国のニュージーランドやオーストラリアの女子選手であっても同様の傾向にあった。また男子選手においても、日本代表の大野均選手は元野球選手であり、最近では東芝から日本選抜に選出された知念雄選手は大学卒業まで日本を代表するハンマー投げの選手であった。

ラグビーという競技が大学生年代から本格的に鍛錬しても十分通用するのは、道具を使わず、ボールを持って走る、人とぶつかるという人間が本来もっている運動能力をそのまま生かすスポーツだからではないか。確かにパスや

キックのスキルというものは、センスに加えて経験を積み重ねるほど向上していくものである。それでもラグビーの場合は始める時期が早ければ早いほど良いプレイヤーになるとも限らないとも言われる。また他のスポーツにおいても違う競技から移ってきた子どもが、何年かするとそのスポーツでめきめきと能力を伸ばすということも見られる。むしろ、あまり小さいうちから一つの種目に偏ってトレーニングしてしまうことで、その種目に応じた身体の動きは得意でも、他の動きに巧み生かしくなる恐れがある。そういう柔軟性に欠けた身体は、自ら慣れ親しんできた種目においても、新たな技を身につけるといった局面でデメリットとなることがある。

あらゆるスポーツに対応しうる人間の体力とは何だろう。思いつくままに挙げてみるが、「筋力・持久力・身体の柔軟性」などであろう。筋力は瞬間的に力を発揮する能力であり、動きに力強さを生み、運動し続ける能力である持久力は粘り強さとなる。柔軟性はしなやかな動きを可能にする能力で、しなやかさといったことからだのパネとなり動きにしなやかさを加える。これらは単にからだのうごきのことだけではなく、人が生きる上で、特に他者との関わりのおかげで求められる力のように思う。自分とは異なる考えの人と一緒に何かを作り上げていこうとするとき、自分の考えをしっかりと持ち、相手の考えと自分の考えをじっくり闘わせてすりあわせていく作業、時には自分の考えも柔軟に変えていけるしなやかさが必要になる。こじつけだと言われるかもしれないが、そうとばかりは言えない。

そのような力を子どもたちに身につけさせるにはどうしたらいいか。

実際に筋力・持久力・柔軟性をつけるからだの動きを体得することが、重要なことだと考える。筋力をつけるために行われる筋力トレーニングは、決して楽なものではない。短期間で成果が表れるものではないが、毎日地道にトレーニングを続けていくと、以前には上げることができなかった重さのバーベルを上げることができるようになってくる。成果を焦らず、今の自分の努力を信じて目標に向かって地道に努力する以外にはない。そういう経験が人生を歩む強さを生まないはずはない。

持久力をつけるトレーニングは、もっと時間がかかる。長い距離を走る、階段を往復するといった本当にきつい訓練を経なければいけない。どんなに基礎的な体力があったとしても、トレーニングをさぼれば途端に持久力は落ちる。つまり、努力したからといってすぐに成果がでるわけでもなく、しかしやめてしまえば確実に後退してしまう。また、筋力のようにバーベルの重さのような確実な指標があるわけでもなく、そのために目標そのものが見えにくい。つまり持久力を得ようと思えば、見えない目標に向かってたゆまず努力するしかないのだ。ねばり強さを生む所以である。

からだの柔軟性は、多分に生まれ持ったものもあるが、トレーニングの方法によって高めることは可能である。重要なのはからだを緩めることである。からだのあちらこちらにある強ばりをほぐして力を十分に抜くことができなければ、柔軟体操をすることさえ難しい。運動というのは緊張と弛緩の繰り返しだと言えるが、柔軟性は、その弛緩の状態をいかにつくっていくかに大きく関わっている。からだを緩めるというのは、自分のからだを意識によって統御しようとするのではなく、自分のからだを水に委ね

て海の上に浮かんでいるかのような状態である。自分のからだを外界へと開くことである。おそらくそのように自分のからだを開くことができれば、外界のさまざまな要素が自分のなかに入ってくる。緊張して背中を丸めているときには、周りのかすかな風のそよぎや光の動きなどに気づくことはできない。海に浮かんでいるように、あるいは芝生に寝転がっているときのように、からだを外界へと開いていれば、そうしたものに気づくことができる。そのような経験は、精神のしなやかさへと繋がっていくだろう。

もちろん、そうした身体的な経験がなければ、強さやねばり強さやしなやかさが得られないと言いたいわけではない。さまざまな疾患や傷害によってそのようなトレーニングができない場合もあるだろう。ここで言いたいのは、生きる上で必要とされる精神的なちからは抽象的で目に見えず、どのようにそのちからを身につけていくのか難しいと考えがちであるが、そのちからは身体を鍛える中で育み、自然とちからとなっていくと考える。自らのからだを動かすことによって得たものは、そう簡単にはゆるがない。人間の心を育てるのに、教師や親の道徳的な話、教材の『心のノート』なるものに文章で書き入れるといったことだけで事足りるとはとも思えない。

生きていくということは、一人ひとりのからだまるごとの行為である。食べることも、寝ることも含めてのことである。食育が叫ばれたり、生活時間調査がなされたりするが、何かそれらはどこか現象だけを追っているように思う。学校で事細かに、毎日の食事や生活時間をチェックされるということは、何かとてもグロテスクなことのように思う。それよりもむしろ、述べてきたようなきちんとした体力づくりをした方

がいいのではないか。筋力トレーニングや持久走をすれば必然的にお腹は空くし、深い眠りを得られる。きちんと栄養のバランスのとれた食事と睡眠をとらなければ、そうしたトレーニングについて行くことはできない。食育や道徳や生きていく上で大切なことを、言葉で説明しなくともそういうトレーニングを通じて実感としてわかっていく。そのことの方がよほど重要なのではないだろうか。

「心の教育」などと言われるが、人間の心に外部から働きかけるというのは、人間の本源的な自由と相容れない。また、心は外部から働きかけられて形成されるようなものでもないだろう。からだに対する外部からの働きかけも同様に見えるかもしれない。しかし、ここで言いたいのは、からだを一定の方向へもっていかうとすることではない。それぞれが自分の身体に対して目を向けるように働きかけて、基礎的な体の根幹をつくっておけばそこからそれぞれの志向や状況に応じて、自分なりにちからを伸ばしていけるということである。

次に感性について考えたい。感性とは何だろうか。

拙著『楯円の学び』¹⁾でも考えたことだが、筆者は感性とはセンスと非常に近いけれども、それとは少し違うものとして捉えている。センスは育てるのが難しい天性のものだとして、感性は育てることができるのではないかと考えているからである。スポーツにおいてはセンスがあるとかないとかとよく言われるが、センスとは何かというとは実はよくわからない。何か尋常ならざるプレイをする選手を見て、センスがあると事後的に言っているだけではないかと。よくわからないものだから、とりあえずセンスは天性のもので育てられない、それに対して感性

はセンスと見まがうばかりのものだが、育てることができるものと定義づけて話を進めたい。

感性を育てるといえるのはどのようにして可能なのだろうか。おそらく知識やスキルというようなものが、その土台となるだろう。しかしいくら知識やスキルを積んでも、それがセンスと見まがうばかりの感性へと至るためには、何か足りない。感性は知識やスキルの積み上げから、一段何かしら跳躍しなければならないような地点にあるように思う。この跳躍を引き起こすものは何か。おそらくそこにイメージとかイマジネーションが大きく関わっているように思う。つまり知識の積み上げや、スキルの繰り返しの中で、からだだけではなく、イメージやイマジネーションが鍛えられた時にこの跳躍は可能になる。センスがあると言われる選手が、なぜそのプレイを選択したかと問われて、「説明はできないけれど、ちょうどそのタイミングでボールが来ることがわかった」とか、「なぜか相手にタックルされる気がしなかった」とか、「ゴールまでの道筋がパッと見えた」といった神懸かり的なことを言うが、それはいわゆる科学的には説明できないことであるのでそう表現するのであって、そこには自分や他者の動きに関するイメージのちからが大きく働いているのではないかと思う。

からだはそれ自体が外部と切り離されてあるわけではなく、環境と相互作用のなかにある。そのため、身体内感を強めていくということは、自分の周りある環境への感度を上げていくことにもなる。それは言葉にするのは難しいけれども、例えば人間関係において「これ以上深入りすると危険だ」とか、「この話は何か怪しいぞ」といったことを感じ取る力にも似ている。あるいは「この場所は危険な匂いがする」

とか「ここでは安心していい」といったような環境の評価ができるちからでもある。本能が進化した動物と言われる人間が、本源的にもっていた状況を察知し危険を回避する能力と言うようなちからを取り戻すことが可能になって行くことではないだろうか。

本来、人間が生きるということは、感性を介して自分と世界との関係を紡いでいくということに他ならない。外界からの情報をシャットアウトして感性を閉じてしまうこと、それは生きることを放棄することを意味する。

確かに現代社会は生きづらい。世界から引きこもって、バーチャルな世界と自分との間だけで情報を交換しているだけなら傷つかずに済む。でも、それで人生の妙味を味わえるのだろうか。何でも体験すればいいとか、やってみなければわからないといったことを言いたいのではない。常に流動的でつかみどころのないこの世界をどう切り分けて、どう見るかというのは、それぞれの感性にかかっている。せつかく生きているなら、その見方は多様性に富んでいる方がおもしろい。

感性はそのような見方の転換を可能にする。それだけではなく「見方の縮尺」とでもいうべきものを自在に変えるのも感性のちからである。「見方の縮尺」とは起きている事象について、あるいは目の前にいる人について、近視眼的に見るのか、歴史的あるいは社会的な状況などを含めて広い視野から見るのか、というような縮尺の強度を変えることを意味する。例えば、今自分が辛い状況にあるとして、そこにだけフォーカスすると自分だけが辛い目に遭っている、自分だけが苦勞させられているという見方しかできないが、縮尺を変えて未来を見とお試ししてみると、いい勉強しているなとか、これが確

実に将来力になるなといった見方ができるかもしれない。あるいは、苦手とする人がいて、その人と自分の関係だけを見ているとその人はただ嫌な人ということになるが、他の人も含めた大きな状況でその人を見てみると、別の見方ができれば、見方が多様にできる。そうすると嫌だなと思っていた人の違った一面が見えてくる。

本章で見てきたように、体力と感性は、それを育てることによって未来に向けて人間の自由度を上げていく。それを身につけていることによって、その後の人生は各自の志向性と状況によっていろいろな選択肢へと開かれていく。その意味で体力と感性は、生きることにおける体幹だと言いたい。

第2章 こだわりを創る —「教えない」指導

元日本代表のラグビー選手で現在日本代表チームGMである岩淵健輔さんは、現役時代チームの戦術的起点となり、チームプレイの状況判断を切り盛りするスタンドオフ（背番号10）というポジションで活躍した。戦術的起点であり、状況判断の基軸となるという点から考えると、必然的に相手からのプレッシャーをより多く受けるポジションである。世界レベルで格上のチームと戦う場合に、もし彼が小さな判断ミスをするのであればチームは総崩れしてしまう。心技体の能力に長けているばかりでなく、きわめて高度な知性や感性も持ち合わせなくてはならない。彼は身体能力に長け、ラグビー専門技術や知識を身につけた一流選手であったが、ケンブリッジ大学の大学院で国際政治学の修士を取得したことからも分かるように、

ラグビー以外の場でも一流として通用する明晰な頭脳を持った人である。

その彼が、日本ラグビーフットボール協会のハイパフォーマンスマネージャー（中長期的な一貫指導体制の確立、若年者層から大学生くらいまでの有望選手の発掘と育成、エリート指導者の養成が主たる職務）であった当時、全国のラグビーチームを周って指導現場で強調したことは、「指導者はラグビーを（正確にはラグビーだけを）教えないでほしい」ということであった。それはラグビーにまつわるもろもろの知識や技能のことを言っているのではなく、若年者のうちから、ラグビーをあまりにも技術的・戦術的な側面から強化してしまうことへの警鐘である。チーム競技であるラグビーにとって、技術的・戦術的強化こそ、当然チームのパフォーマンス向上には不可欠である。しかしながら、チームが勝利を求めるのは、勝利することを目的とする年代になってから十分であるという考え方である。

岩淵さん自身、大学までラグビー漬けの生活を送ってきたわけではなく、ラグビーは週に2、3回程度で他のいろいろなスポーツもやっていたそうである。選手としての活躍は彼の並外れた運動能力によって可能であったということももちろんあるだろう。しかしそれだけではないように思う。

これまで競技力を高めあうスポーツは鍛錬主義偏重で、そのスポーツに命をかけるかのような選手ばかりを育ててきた。しかしその風潮は最近少しかわってきたように思える。例えば2010年2月4日の朝日新聞夕刊に「不惑ラグー走り続ける」というタイトルで東芝の松田努選手のことを書かれていた。40歳までラグビーを続けることのできる秘密について「無理な節制

はず、余暇も楽しんで、上手に自分の体とつきあってきた」ことが挙げられていた。また、元日本代表のラグビー選手の平尾剛さんは、スポーツをする場合に必ず求められる準備運動を、指導者が選手たちに一斉にやらせることに対して疑問を投げかけている。スポーツにおいて準備運動をすることの重要性は誰でも知っている。現に筆者も自らがトレーニングするときには入念に準備運動をする。またも体育の授業では準備運動を必ず行うよう指導し、指導者向けの講習会でも準備運動の必要性を繰り返し伝える。しかし平尾氏は、準備運動をするのが良いからと言われてやるというのでは、本当の準備にならないと考えているのである。むしろ自分のからだに向き合って、その日の自分の調子を知るようなやりとりの方が、準備運動としてずっと重要だと述べている。またNECグリーンロケッツで活躍した、元日本代表のグレン・マーシュ選手は、試合前の準備運動を一切しなかった。皆が準備運動を開始しても、一人ロッカールームに残って、瞑目しながら精神の集中力を高め、そのまま試合に臨み、最高のパフォーマンスを発揮してきた。筆者も含め、チームスポーツ、集団を扱う指導者として経験のあるものからすると少なからず違和感を覚える。しかしそのように感じることも自体が、従来の準備運動のみが一律にスポーツにおける準備だと考えている証拠だろう。選手以上に、指導者が長年培ってきた経験から抜け出すのは本当に難しい。

この4人の考え方に共通しているのは、外部からからだに無理に働きかけることに対する疑問である。人間には恐ろしいまでの順応性がある。年齢の低いうちはなおさらだろう。それゆえ教えられたことはその子どもの癖となって身につくし、栄養学的な知見ではよいとされる食

餌法、また準備運動はスポーツ科学で良いという概念などが、実際に動き続けている自らのからだをコントロールしようとする。自らのからだに問いかけることなく、無理な働きかけを繰り返していると、自分のからだを十分に生きることができなくなる。本来、私たちはからだの調子を感じることができし、熱があるわけでも風邪を引いているわけでもないが、なんとなく調子が悪い、からだが動かないという日がある。それを外側から一律に統制しようとしてもうまくいかない。それを指導者が怠け心だとか緊張感が足りないからだとかといった精神論から、無理矢理にでも鍛錬しようとする。それによって子どもたちはますます自分のからだ向き合うことをしなくなり、どんなに調子が悪くても怒られるのが嫌で練習をして、挙げ句の果てに失調したり、大なり小なりの怪我をしたりする。せっかく次の試合に出ることになっていたのに棒に振るということさえ起こってしまうのである。

からだの外部から無理に働きかけるというのは、眠い時に無理矢理たたき起こされるのをイメージするとわかりやすい。深い眠りに在るとき起こされると、からだは動かないし気分も良くない。とは言え食事中でも自転車の上でも眠ってしまう乳幼児のように、からだの欲求のままにするのがよいと言いたい訳ではない。眠くても起きなければいけないことがあるように、スポーツ選手も気分次第で休めるわけではない。ではどうするか。

自分なりに気持ちの良い目覚め方を探せばよい。

自分のからだをきちんと生きてさえいれば、無理な運動によって怪我をすることは減らせると考える。自分のからだをきちんと生きるとい

うことにとって、最も大切なこと、また必要なことが、第1章で述べた体力と感性である。第1章で体力として挙げた例が筋力とか持久力とかいったものであったために、本論文も鍛錬主義に立つと思われたかもしれない。しかしそうした体力が、精神的なものごとへ向かう姿勢や心構えというものと共にあることを論じたように、また体力を感性とセットで考えたように、筆者が大切だと思う体力とは自らのからだの根幹に関わる部分にまで、選手自らがきちんと向き合って育てていくということである。

ラグビーはチームスポーツである。だから個々の選手が勝手にバラバラな動きをしていたのではゲームにならない。しかしそのことは、すべての選手たちを画一的にするということとも違う。指導者から見れば、すべての選手に対して一律に同じトレーニングをし、その数測定した数値を一本のものさしに並べて選手を比較する方が楽であり、誰が努力をし、誰がさぼっているのかすぐわかるのかもしれない。しかし、一人ひとりの選手は体力も体格も違うし、そのときに置かれている状況によってモチベーションも違うだろう。先に述べたように、同じ選手であっても、毎日体調は変わるし、それに伴う精神的な変調もあるだろう。個々人の毎日の体調に合わせて、きめ細かいトレーニングメニューを組み立てることはもちろんであるが、どんなにきめ細かい配慮をしたところで、やはりそれは外側からの押しつけでしかない。指導者が良かれと思ってした配慮も、結局はその選手が自らのからだに向き合う回路を閉じてしまっていたのでは何の効果も生まれない。

ではどうしたらいいのか。

指導者ができることは、選手一人ひとりが自ら考えられる環境をつくり、さまざまな状況設

定の中で気づかせることである。知識やスキルというものは、具体的であるために指導者が伝え教えることが容易である。しかしいくら具体的な知識やスキルであっても、本当の意味で選手が身につけるためには、その知識やスキルを自らのからだで実践できるまで体得できる域まで到達しなければ意味がない。

選手が自ら考え気づいていくためには、選手の側にそうありたいとするモチベーションが必要だろう。モチベーションをどう高めていくか。そのことこそ指導者には求められるのである。具体的に目の前に大事な試合があり、それに勝ち続けていれば、自然と選手は自らのプレイの精度を上げようと、貪欲に学ぼうとするかもしれない。逆に試合に負けているときにはどうするか。あるいは試合に出るチャンスのない選手に対してはどうするのか。指導者が教えるべきこととは、そういう場合にも通用するものでなければならない。

指導者が教えるべきこととは、おそらく具体的な知識やスキルの前に、そのクラブ全員がプレイをする上で準拠点とするべき事柄ではないかと考える。自分たちがプレイしているこのクラブは一体何を目指しているのか、そのクラブの究極のこだわりとは何か？

それは理念と言い換えてもいいかもしれない。その理念とは何であるか、一体われわれはどこを目指し、どこに向かっていくのかということ、さらにそれを実現することの重要性を繰り返し説いていくとする。それが浸透すれば、選手は自ら理念実現のために何をすべきかを考えるようになる。言ってみれば、スキルは教えないが、究極のこだわりを創るということである。もちろん、選手自らが考えて、自分にはこういうスキルが足りないから教えてくれということとはあ

るだろう。気づきを与えるためにスキルの解説をすることもあろう。スキルを全く教えないということではない。指導者がスキルを一から十まで繙いて説明しトレーニングすることもあるかもしれない。ただそれが選手一人ひとりの血肉になるには、そのもとになるクラブ全体の理念が根幹になければならないということここでは言いたいのである。

他のスポーツもそうなのかもしれないが、筆者自身も指導者として若い頃には戦術がどうか、パスやキックの仕方がどうか、といった細かいことにばかり目がいていた。しかし指導経験を重ねていくうちに、選手に話すことと言えば、選手たちが日ごろ送っている生活のありかた、そして姿勢や心構えといったものが大半を占めるようになってきた。スポーツの目指すところの本源的価値や哲学、いわば人生訓みたいなことを徹底的に説くのである。

具体的にいえば、君たちは何のためにここにいるのか、なぜラグビーをやっているのか、ラグビーをやって何を目指すのかといった問いかけである。具体的なプレイの一つひとつ教えて積み上げていく方が、成果が目に見えて指導者は安心できる。いくら理念を繰り返していても、暖簾に腕押しで伝わっていないのを感じて愕然とすることも多い。それでも、高い目標を見ながら、まず全体の絵を見せた上で、一つひとつのプレイの意味を選手一人ひとりが考えていくということが大切だと思う。というのも、選手は指導者を超えていくべきだと考えているからである。積み上げ方式の終着点は、指導者の目標と同じ地点である。それでは指導者のよりよきミニチュアをつくるだけである。そうではなく、スポーツの指導も含む教育とは、本来指導者が見ることはないだろう未来に向けて、今の

若者に自らを越えて歩む道を示すことである。

理念を示し、それに向けて一人ひとりが考え行動していくということは、実はその理念を越え、その先の未来にまで歩みを進めることを可能にする。一人ひとりが自分で考えて行動していくことを繰り返すうちに、プレイヤー自身が自らの理念を持ち始めるからである。自分でつかみとった理念をもったプレイヤーは決して指導者のミニチュアではない。指導者のちっぽけな理念を越えて、さらにその先の世界を創っていく。教育という仕事は、学び手の歩むべき方向を示しながら、しかし学び手が自らの手でその方向を修正し、さらには前を歩いているはずの指導者を追いついていくように促すという矛盾した仕事である。それがスキルは教えない、こだわりを教えるという意味である。

ラグビーの世界にはそのような指導の伝説的な先例がある。明治大学の監督であった北島忠治先生は、「前へ」という究極のこだわりを示し、明治大学の選手は今でもみなその理念を準拠点としている。早稲田大学の監督であった大西鐵之祐先生は、「接近・展開・連続」ということを打ち出した。これは具体的な戦術に関わるスキルを示しているように見えるかもしれないが、そうではない。「接近・展開・連続」とはラグビーの原理である前進・継続・支援を実現するために必要な根本を示している。簡潔な言葉にこめられたこだわりは代々受け継がれていくなかで、現実の試合が一つひとつ積み重ねられることでその意味が豊かになっていく。多くの指導者や選手が、その言葉に自分なりの思いを重ねていくことで、その理念はゆるぎないものとなっていく。そうした積み重ねのなかで、これらの理念は、最初に言われたときの意味を大きく超えた内実と射程を持ったものへと育っ

ているのだと考える。毎年12月第一週の日曜日は早明戦ラグビーである。ここには、早明のOBや関係者を含めた多くの人が集まってくる。実際の試合を見にきている以上に、明治の「前へ」と早稲田の「接近・展開・連続」という双方の究極のこだわりとも言うべき理念を、確かめにきているのではないかと思っている。もし仮に一方のチームが、この理念を忘れて、ただのラグビーをしたとしたら、この試合の熱気はなくなってしまうのだろう。

本章のはじめで紹介した岩淵さんが、未来の日本代表選手となる子どもたちの育成を担うハイパフォーマンスマネージャーとして、「ラグビー指導者はラグビーだけを教えないでほしい」と言っていた真意は、ラグビーというスポーツがプレイにおける戦術やスキルにとどまるものではなく、人間が生きていくうえで何が一番大切で、何にこだわりを持って生きていかなければならないかということを示しているのではなかろうか。指導者には是非この意味十分理解してラグビーを教えてほしい。それが未来を創ることにつながっていくのだと信じている。

第3章 価値を創る—スタイル論

スポーツにおいて、ゲームデザインということが言われる。ゲームデザインとは、監督が試合ごとに自チームの特徴、相手チームの特徴、さらには勝率などの状況、試合の位置づけや天候など環境や条件を加味した上で、自チームのゲームがこうなったらよいなという期待感を込めて作り上げるシナリオのようなものと言えるだろう。環境や条件といったものと密接に結びついているのがデザインであり、その中

で個々人が創造的に振る舞うとはいかなることかということを考えることである。ゲームデザインは監督やコーチなどの指導者によって作られる。しかし、デザインに忠実に従って各選手が動くことが重要なのではない。デザインはその時の状況に応じた最適解というものであるが、選手は機械的に動く駒ではなく、一人ひとりがその状況に身を置きながらそれぞれの判断をして動く。監督が考えたデザインと一人ひとりの選手がからだで感じた判断とがぴったり一致しているチームは確かに強い。しかし自分のからだで感じた判断とずれたとき、デザインに負けないで自分の判断を信じられるような選手で構成されているチームはもっと強い。それは、監督が予想もしなかった（それゆえ相手チームは尚更だ）創発的な現象が起こる。監督の考えるゲームデザインを無視して各自がてんでばらばらに動けばいいと言いたいわけではなく、個々の選手がゲームデザインを完全に理解した上で、それ以上の最適解を導き出すということである。それゆえその解は、当初のデザインと全く違う方向へと外れるということはないだろう。むしろそのデザインを強化したもの、あるいはそのデザインをより洗練して複雑にしたものになる。

一人ひとりの選手によるデザインの洗練が可能になるためには、前章で述べたような究極のこだわりが各自のからだの深い部分に確実に浸透していなくてはならない。

デザインに埋もれない一人ひとりの判断の表れをここではスタイルと呼びたい。スタイルという言葉は多様に使われる。ファッションスタイル、ヘアスタイル、あるいはライフスタイルというような生き方の意味でも用いられる。おそらくそれぞれの時代の流行に沿いながらも、その流行に埋没してしまうのではなく、状況に

棹さしながら自分なりのこだわりを表現している場合に、その人のスタイルが注目されるのだと思う。

ラグビーにおいても一人ひとりの選手のプレイスタイルというものがある。それは一朝一夕にできるものではなく、長年その選手がこだわりをもってプレイしつづけてきたことから生まれる。しかもそれは見てきたように、個人のなかだけで完結するわけではなく、所属するチームの理念やカラー、そしてデザインとの相互関係の中で醸成されていくものである。だからある選手のスタイルは一緒に毎日練習している他の選手に理解されていき、常に流動的な試合において、全く新しい状況においても、他の選手と連携がとれるのである。

前章でも言及した元日本代表の岩淵健輔さんは、後ろから走ってくる選手にボールをパスするときにはゴールポストの方を見ていて、パスする相手の方向は見えていなかったという。なぜ見なくてもパスできるか。それはもちろん並外れた状況判断能力と感性が備わっているからという説明もできるのだが、岩淵さん自身は「自分がパスしたい場所に仲間の選手を来させればよい」と言う。仲間の選手を来させるように自分が動く。いったいどのようにしてか。それは岩淵さんの動きのスタイルというのが、一緒に練習している選手に共有されていて、そのスタイルとパスを受ける選手のスタイルとがきちんと共鳴すれば、パスは必然的に通るとことなのだと思う。私たちが「あうんの呼吸」と呼ぶような事象はこういうことなのだと思う。

スタイルというと何かしら定式化した枠組みのように見えるかもしれない。しかしスタイルは一朝一夕にできるものではない。長い時間にわたる繰り返しのなかで徐々に作られていくも

のである。ある人が特定の行動を一日したからといっても、それはスタイルにはなり得ない。当初から見れば気の遠くなるように思われるくらい長い年月を経て、そのことにこだわり続けたなら、それがその人のスタイルとなっていくのだろう。

このように考えていくと、スタイルというものはあらかじめ与えられるものとしてあるのではなく、日々の実践のなかで、作られつつ改変されている流動的なものと見ることができる。そのようなスタイルの変容は、実践しているその人本人の変容を意味している。人の内面が変わったから、その表れとしてのスタイルが変わったのか、スタイルの変化に牽引される形で人の内面が変わったのかは、いろいろな場合があるだろう。何か大きな出来事に遭遇して、そのことが作品のスタイルや生き方のスタイルに影響するということは大いにあり得る。逆に生き方を変えること、あるいはファッションや髪型を変えただけで心の持ち方が変わるということも往々にしてある。人間の内面というのは自我とか意識とかと言われるものだろうが、それは外界と切り離されたものではなく、自分の外面ともあるいはその外面が対峙する外界世界とも影響しあっている。

スタイルはこのように、「意識や感情といった人の内面」と「その人が生きる環境に対峙して示す外面の両方」の影響を受けながら作られ、それは双方へ向かって影響を及ぼす。それゆえ自分なりのスタイルを身につけていくということは、自己の確立でもあるし、また自他の関係や環境における自分の位置付けを知ることもある。スポーツにおいて繰り返しの練習の必要性が頓に強調されるが、それは忍耐力とか克己心といったもののためにだけなされるべきもの

ではなくて、その繰り返しのなかで、選手が外界と自らの身体や内面とを出会わせていくことで、その選手なりのスタイルをつくるためにもなされるのだと言える。

歩いているときに、足の動きや手の動き一つ一つに意識を向けていたら却ってうまく歩けない。私たちはどのように足を振り出すか、どのように着地するかということを意識することはない。それゆえに、歩きながら見える景色を楽しむことができる。それと同じで、制作過程における一つひとつの作業に意識を向けるのではなく、その作業をスタイル化することで起こっている現象そのものと純粹に向き合うことができるのである。

プレイのスタイル化の先にあるのは新たに生み出された何らかの価値である。その意味で、スタイル化とは価値を固定していくパターン化とは違う。プレイがスタイル化することで初めて私たちはそのスポーツを楽しむことができる。スタイル化は、なにも専門的にその競技に関わっている選手や毎日部活動でやっている選手にのみ生じるものではない。自己と外界とが自分のからだの動きにおいてちょうどよい形で出会ったとき、どんなレベルであれスタイルが生じていると言える。その均衡が生まれたとき私たちは楽しみを感じる。単純なキャッチボールやボールの打ち合いが楽しいと感じるのはそういうことだと思う。

しかし、その均衡はまたすぐに崩れる。自らの技量が上がってくることによって外界との接触の仕方が変わるからである。均衡が崩れると私たちは再び技術やからだの動きなどの一つひとつに意識を向ける。そしてその意識的な繰り返しのなかで一段上のスタイルを身につけていく。そのような均衡と不均衡を繰り返しながら、

私たちは何らかのスキルを得ていくのだ。しかしそれは単なるスキルトレーニングの方法ではない。その都度の均衡において楽しみが生まれていることからわかるように、私たちはそのようなスタイルを得ることで、その都度世界と純粹な形で出会い、そこに生きることに喜びを見出すことができる。スキルトレーニングは、その喜びを得るための単なる方便なのである。

第4章 時計を創る—ヴィジョンの構築

2011年関東大学ラグビーのリーグ戦1部で流通経済大学は初優勝を果たした。実に創部以来46年目のことである。筆者が最初コーチとしてやってきたときは、3部Cという位置にいた。それから一つずつリーグを上がり、1997年の1部へ昇格してからも14年を経てようやく到達した優勝である。しかし大学選手権では戦績を残せず道半ば、大学日本一という目標に到達するまでにはとてつもない時間がかかっている。しかし焦りはない。なぜなら大学チームで選手を育成するということは、単なる勝利や優勝だけが目標ではないからである。

選手を育てるということは、4年間でラグビーのスキルだけでなく社会人としてその先の人生をしっかりと生きていく土台を作ることだということはよく言われる。その通りである。だが、そういう既存の価値を受け入れていくだけでなく、チーム作りは時計を創るようなものだと考えている。

時計を創るというのは奇妙な比喩だろうか？ 時計は単に時を刻む道具であると思えばそうである。しかしチームを作るというのは、18歳の多くの若者一人ひとりの成長とともに、まだ見ぬ価値を創るということでもある。その作業は、

見えない未来に向かって、まだ正解のない新たな価値を人に先んじて見出していくような創造的なものである。つまりすでにあって皆が受け入れている既存の価値をただ受け入れるのではなく、常に新たなチャレンジをし続けることでしか果たされない。そのことを考えたとき、それは時計を創るとしか言いようのない作業なのである。

大学の社会貢献が言われるずっと前から、地域にラグビーチームを作ってラグビー部の学生がその指導に当たるという仕組みを作った。それが後にNPOになり、現在は総合型スポーツクラブへと発展している。先にNPOや総合型スポーツクラブの枠組みがあったわけではない。手探りで地域のお父さんやお母さんと語り合いながら創っていったチームが現在は幼稚園生から社会人、女子ラグビー、トップクラブ選手権に出場するチームなどへと広がっているのである。これも時計を創る作業であった。

現在の流通経済大学ラグビー部の監督、事務局長、コンディショニングスタッフなど多くの役割をラグビー部出身者が担っている。最初は私と数人のスタッフしかいなかったが、今では様々な部門に分かれて、スタッフだけでも40名に及ぶ大所帯である。一人の指導者ができることはたかが知れているが、その指導者が次の世代の指導者を育て、仲間を呼び込み、その人たちがまた次の世代のスタッフを育てていく。そうした指導の広がりもまた時計を創る作業である。

なぜ時計なのか。やはりそれは未来という「時」に関わる作業だからである。現在の社会はすぐに費用対効果とかアカウンタビリティとかといった形で効率や成果を求める。しかし、すぐ目に見える効果や成果というものだけでは、

チームを作ることはできない。チームを作るといふことは、人を育てるといふことであり、人を育てるといふことは単に強い選手にするということだけではない。その人がその後の人生をどのように歩んでいくかということも含む、見えない不確実な未来へ向けて、ひたすら歩み続けるということである。もちろん、一人ひとりの人生は個々が切り開くしかない。しかし、それぞれ独自の方向へと広がるその人生においてコアとなるものを作ることを目指している。それがヴィジョンの構築である。

人の人生のコアになるヴィジョンというのは、選手権の優勝とか、就職率の上昇とかといったような目に見えるものや数値化されるようなものではない。もっと一人ひとりの生きる根っこになるような遙か先にある世界観とでも呼ぶようなものである。それを今言葉にするなら「平和な社会を創る」ということである。陳腐に聞こえる物言いになるが、それがどれだけ難しいヴィジョンかということとは歴史が教えてくれている。不可能にも見えるそのことを、小さな大学のラグビー部から本気で実現することを考えている。一見バラバラに見える筆者の志向性やチームの動きもそのヴィジョンによって支えられている。

2012年から流通経済大学ラグビー部ではすべての部員にTOEICを受験させている。現在世界共通語となっている英語の能力を身につけさせることは、これから世界に出ていく学生たちが自分の言葉で多くの国々の人としっかりとコミュニケーションすることで、多様な価値を認め合うことへとつながっていくと考えているからである。アカデミーをつくり、レフリングやトレーニングに関する知識を学ぶ場を整えているのも、世界と渡りあっていくときに圧倒的な

知識力が求められるからである。

筆者は2011年アジアのラグビーフットボールユニオン（ARFU）の理事になった。そこでアジアを中心とする世界のラグビー協会の人々と議論するとき必要なのは、幅広い知見と圧倒的な語学力、そして自らの立場を相手に理解してもらうための戦術だということを肌で感じた。日本ラグビーフットボール協会の代表として行っているのであるから、日本ラグビーの權益を守るということが絶対的な使命としてあるが、それだけではなくラグビーというスポーツを通じて世界の人々とコミュニケーションを図ることで、世界平和の一隅を担うために努力している。これも時計を創ることだと信じている。

未来は見えない。だからなるようになるさと手放すのではなく、また既存の価値に流されるのでもなく、時計を創ることでまだ見ぬ未来へ向けてヴィジョンを構築していく。一つの大学チームを作るそのことは、とても小さな社会ではあるが「平和な社会を創る」とことと密接につながっているのである。

第5章 未来を創る一突き抜ける力

どんなスポーツにも人の心に訴えるものや人の成長に役立つものがあるだろう。スポーツの持つ人間形成機能は、いかなるスポーツの指導者にめぐり合っても異口同音に肯定される。そして、スポーツには多くの仲間が集ってくる。この仲間たちに一つの思いが宿れば、大きなちからが生まれる。

ラグビーにはこの競技を称揚する多くの標語がある。プレイ一つをとっても、国会の答弁で総理大臣が「みんなでスクラムを組んで頑張りましょう」などという。「一人はみんなのため

に、みんなは一人のために」「ノーサイドの精神」も様々な場面で使われている。こういったスポーツが涵養する精神性というものは、間違いなく社会に影響を与えるだろう。

「ラグビーには社会を変えるちからや人を育てるちからがある」と書いた。「リーダーをつくり上げるちからがある」とも。また、それが何であるかをラグビー経験者たちは言葉にしてこなかった。あえてわたしはここで言いたい。ラグビーのちからとは何か。

1. Believe

南ア戦のあの瞬間、リーチが堀江に投げかける以前から、チーム全員の中には答えは一つしかなかったのだろうと思う。いったい何を信じるのか？身を挺してボールを守り、自分にパスを繋いでくれる仲間を信じるのか……。必ずフォローに来るだろう仲間を信じるのか……。

ラグビーは仲間同士の関係の中でプレイをする。その中で人とは何か、信頼とは何か、ということを具体的に覚える。したがって他者との信頼関係が成立しなければプレイは成立しない。

ラグビーでは自分自身を信じることが必要になる。自分より大きな相手を止めるためには、練習で培ってきた自分の力を信じるしかない。信じることができなければ、相手の懐に飛び込むことはできない。ラグビーは激しい鍛錬の中で、自分を知り、自分自身への信頼を生み出す。

ラグビーには、人と人を繋ぐちからがある。そして自分の歩んできた道と自分の今を、また自分の今を自分の未来へとつなぐちからがある。

2. One for all, All for one

ラグビーの世界を超えて、よく使われるこの言葉である。One for allは、全体のために一人

の選手が犠牲になること、All for oneは、一人の選手のために他の選手たちが援助に回ることだと思われがちである。

それでは、犠牲や援助をいとわないことがラグビーのちからなのだろうか？ 確かにそういう面もある。が、少し違う。犠牲とか援助とかということではなく、ラグビーでは一人の選手のプレイが、その人だけにとどまらないということの意味しているのだ。まさに、リーダーを生み出す原理がここにある。

3. リーダーの存在

リーダーとは・・・

大きな声で人を先導する人？

困難な仕事を率先して引き受ける人？

いつもみんなの中心にいて、和を作り上げる人？

リーダーとは、その人自身の行動が常に全体を意識して実践できる人であろう。自己の利益や我意に囚われるのではなく、常に自らの行動を自らが所属する集団と結びつけて考えられる人である。リーダーとは個人的な存在を指すのではなく、集団的な存在を意味するものである。

ラグビーでは特別に能力の高い人がいても、その人だけで得点することは不可能である。一人のプレイは必ず誰かのプレイと関係を持っている。さらに、味方と相手双方の残りの選手たちの位置取りによって、自らの動きを変えていかなければ得点には結びつかない。

このようにOne for allとは、一人の選手の意思決定がひとりよがりのものでなく、常に他の選手との関係の中で行われるということの意味している。そして、All for oneとは一人の選手の意思決定がチーム全体のもの、集団的なものとなるように、他の選手が自らの判断で動く

ことを意味する。その行動は誰か強い人への従属ではなく、一人ひとりの選手が自ら考え、全体との関係性の中で自分の位置を知り最適の選択をすることである。つまりラグビーでは、キャプテンのみがリーダーなのではなく、一人ひとりの選手が、それぞれリーダーとしての役割を持つ必要があり、リーダーとしての資質を培うことができるのである。

本論の中でも述べたが、今でこそ違え、ラグビーの試合の終了はノーサイドと呼ばれていた。試合では激しく戦った相手であるが、日常に戻ったら同じラグビーという文化を担う仲間だという意識を持つ。

不思議なことにラグビーは、楕円のボールを奪い合う肉体的な闘争のスポーツだが、競技の特質とはまったく異なる別の論理が組み込まれている。それがノーサイドという言葉に集約されている。

ラグビーには競技における激しいぶつかり合いやボールの争奪に見られる闘争の側面とともに、そうした闘争を根幹のところを支える深い哲学がある。これはラグビーを実際にプレイした人には、暗黙のうちに身につけていくことであるが、ラグビーを経験したことのない人には理解は難しいだろう。

ラグビーは非日常的なグラウンドという闘争の場で行われるスポーツであるが、試合が終わるとまた日常へと戻っていく。このスポーツに関わることで、日常は単に繰り返される毎日ではなく強度のある日常へと組み変わっていく。われわれラグビー関係者は、ラグビー選手が社会人として立派に活躍する人材がたくさんいることを知っている。その説明はいつでもどこかこじつけにも見えるが、ただ一つだけ言えることがある。それは、“ラグビーはラグビーだけに

終わらない”ということである。

人間がこの社会の中で生きるということ、深い部分で支える確かなものをラグビーはもたらしてくれる。ラグビーのちからが本当に試されるのは、ラグビーという競技から離れた競技場以外のところにあるのかもしれない。ラグーマンにとって本当のちからが試されるのは、ラグビージャージーを脱ぎ、この日本社会に出て行ったときからはじまるのだと考える。社会とはまさにOne for all, All for oneの創造物なのである。この創造物がある限り未来はいつも創り上げることができると信じている。

筆者は今、世界最高峰のラグビーリーグ(スーパーラグビーの参加国はニュージーランド、オーストラリア、南アフリカ、アルゼンチン。この四カ国は2015ラグビーワールドカップ四強全てを独占)、スーパーラグビーの日本チーム・サンウルブズの経営責任者である。このリーグへ参加する意義は、日本で初めて他の競技にも例を見ない世界のプロリーグへの日本チーム参戦ということである。つまり、野球で言えば、日本代表のサムライジャパンがメジャーリーグのレギュラーシーズンを戦うということであり、サッカーであればサムライブルーがイギリスのプレミアリーグでレギュラーシーズンを戦うようなものである。これまで野球、サッカー、テニス、ゴルフなどプロの世界で日本人が単独で世界の強豪クラブに所属して国際的な試合を戦うことがあっても、チームとしてレギュラーシーズンに参加したことはなかった。ラグビーの場合も何人かの選手が他のスーパーラグビークラブに所属してレギュラーシーズンを戦ったことはあるが、活躍は難しかった。

日本人はまず体格や体力で世界の強豪国に

劣っている。つまり圧倒的な物理量で負けているということだ。小さな日本人がこの戦いに挑むためには、自らの特徴である俊敏性や巧緻性を生かし、鋭利な刃のごとく一撃で相手を倒すスキルが必要である。またチーム一丸となって、他のどこの強豪国よりもチームの団結力高くなければならない。われわれはこのスーパーラグビーリーグに参戦するにあたり標語を立てた。

「Break the Line」である。これは目前に立ちただかるとつもなく大きな相手を打ち負かし、堅牢な巖壁を突き破っていくという意気込みを含んだ標語である。われわれはこの参戦によって、将来を背負って立つ日本の子どもたち、アジアの子どもたち、そして世界の子どもたちに、どんな困難でも乗り越えるというメッセージを送り続け、勇気や感動を与え、不可能を可能に変える瞬間を見せていきたいと思っている。

2019年にはアジアで初めてのラグビーワールドカップがこの日本で開催される。スーパーラグビーへの挑戦こそ、2019年ラグビーワールドカップへの挑戦であり、平和な社会を創る闘いでもある。

*スーパーラグビーとは、毎年2～7月に行われ、世界120カ国で放映される、四大陸・五カ国・18チームからなる世界最高峰のインターナショナル・ラグビーリーグである。日本は2016年より『サンウルブズ』として参戦した。筆者はサンウルブズを運営する法人ジャパン・エス・アールの業務執行理事としてこの事業に関わっている。

注

1) 上野裕一・小松佳代子『楯円の学び』叢文社 2010。